

第7回 校長会議あいさつ

R7.9.17 稲垣

ツクツクボウシの声が夏の終焉を告げ、高くなった空が渡り鳥に先を急いているかのようです。学校では、学習や行事の最も充実する2学期がスタートし、市井では、文化芸術やスポーツイベントの季節が始まりました。

今月初めにあった市議会一般質問において、私の学校教育施策について質問をいただき、3期目のポイントとして、特に2点を取り上げて答弁しました。

「1点目は、これから各学校が登るベクトルについてです。出典についての記憶は定かではありませんが、『物質文明の急激な進歩に対して精神文化が追いつけていない』という言葉が頭に強く残っています。物や情報が多くなればなるほど、それらを理解し、評価するためには、その受け手である私たちに、哲学や思想等の精神文化に支えられた、確固とした価値観が必要になると思います。

義務教育に視点を移してみると、国は国家間の経済競争に資する学力を求め、PISAやTIMSSにおける理数系の国際順位を重視しました。また、国語教育においてさえ、日本という国の言語文化を継承する役割よりも、自然科学の論理的思考を支える言語力に偏重した観もあります。産業振興のための人材育成が必要なことに異論はありませんが、それと同時に人文科学を発展させ、人間教育を進めていかないと、幸福感を享受する未来社会の担い手を育成できないと思います。

おりしも小中学校では、タブレット端末の活用も日常化しつつあります。教育委員会としては、学習における効率化や個別最適化による学力向上を強く主導しているところですが、子どもたちの未来の幸せを願うのであれば、その両輪として、今まで以上に、子どもたちに人や社会、自然とのかかわりを深めさせる中で、学年に応じた適度な困難を乗り越えることにチャレンジさせ、体の幹である「体幹」のように、心の幹として、揺るがぬ価値観と強靱なメンタルを意味する「心幹」、これは私の造語ですが、「心幹」を培う教育活動、「心幹教育」を推進していくことが重要であると考えています。

2点目は、新たに取り組むべき喫緊の問題です。近年、小学校低学年で、集団生活に戸惑う子どもたちは増加傾向にあり、これは幼稚園や保育園においても類似した傾向があると聞いております。市長がマニフェストに「親学の推進」を掲げられたように、昨今、社会問題化した不登校やいじめ、特別な配慮を要する児童生徒の増加、ネグレクト等の、教育や子育ての課題を解決していくためには、家庭の教

育力の向上も不可欠であると考えています。

そこで、教育委員会、子ども部、健康福祉部等、関係部局が連携し、0歳から15歳までを見通して、生徒指導上の問題や子どもたちの発達の現状と課題について関係部局の知見を集約し、子どもたちの健全育成のために、家庭教育を支援する手立てを模索していきたいと思います。具体的には、スマホをはじめとする電子機器の適切な扱いや、乳幼児期から始める子どもとのコミュニケーション、心の健康を支える生活習慣等について、その適切な手立てを科学的な根拠に基づいて明らかにして、校長会をはじめ、市P連や父母の会にもご協力いただき、全教職員に周知するとともに、全ての保護者、市民の皆さんに啓発していきたいと考えております。」

各学校においても、「心幹教育」を意識して教育活動を推進するとともに、家庭との連携をいっそう密にして、児童生徒の健全育成に努めるようお願いいたします。